

# 旧制大学・旧制高等教育諸学校のスポーツ活動 ——名古屋大学の前身校を事例として——

高 橋 義 雄

- I はじめに
- II 新制名古屋大学前身校におけるスポーツ活動の状況
- III 外国人教師やトップアスリートによるスポーツ指導
- IV スポーツの組織化と試合形態の変遷（校内対抗から学外競技大会へ）
- V スポーツを通じた中等学校との交流
- VI スポーツの普及と国家の政策的関与

## VII 戦時体制と高等教育機関のスポーツ

## VIII 戦後の新制名古屋大学発足までのスポーツ活動

## IX 結び

# I はじめに

日本の近代スポーツは、明治初期以来、在留外国人や招聘外国人、あるいは帰国留学生によつて輸入され、おもに高等教育機関のなかで、課外教育活動として展開されることになつた。<sup>(1)</sup> 一九世紀後半から二〇世紀初頭（明治二〇～三〇年代）には、地方でも中等学校の生徒や教職員の校友会を中心にしてスポーツ活動が普及していいたため、この時期高等教育機関に進学する学生は、初等・中等教育でスポーツや体育を経験していたと考えられる。帝国大学には、正課体育が設けられていなかつたが、学生の自發的なスポーツ活動は奨励されていた。例えば、一八七七（明治一〇）年創立の帝国大学では創立直後の一八八三（明治一六）年に御殿下運動場で学生の陸上運動会（「競走及其他ノ競遊会」）が実施され、翌年には隅田川で水上運動会（「走舸組大競漕会」）が行われている。水上・陸上運動会は毎年実施され、大会の実施機関として一八八六（明治一九）年に「帝国大学運動会」が設立した。この「運動会」は、毎年運動会を開催し、学生に対しては各種スポーツ・運動用具のサービスを行つていた。一八九八（明治三一）年に「東京帝国大学運動会」が設立し、一九三四（昭和九）年には財團法人格を取得して、同好の士の集まりによる運動クラブとそれを束ねる会となつた。帝国大学以外には、一八九六（明治二九）年に高等師範学校「運動会」

が、一八八六（明治一九）年に慶應義塾「遊戯会」、一八九二（明治二五）年に「慶應義塾体育会」が設立され、スポーツの学内戦や対校競技会が開催されるようになつた。これら近代スポーツの教育システムを通じた日本における普及過程は新制名古屋大学の前身校である高等教育諸学校においても観察される。本論文では、愛知県立医学校、第八高等学校、名古屋高等商業学校、名古屋帝国大学、岡崎高等師範学校の校友会資料<sup>(3)</sup>をもとに当時の前身校の学生が行うスポーツ活動の状況やスポーツ普及に果たした外国人教官を紹介し、さらにスポーツの組織化や施設の整備にともなう試合形式の変容や、高等教育機関と中等学校との関係について考察することが目的である。そして最後に戦時体制に組み込まれていく学生スポーツの状況と戦後の新制名古屋大学に集結するまでの学生のスポーツ活動について紹介する。

## II 新制名古屋大学前身校におけるスポーツ活動の状況

### A 旧制大学（医科大学）の校友会運動部

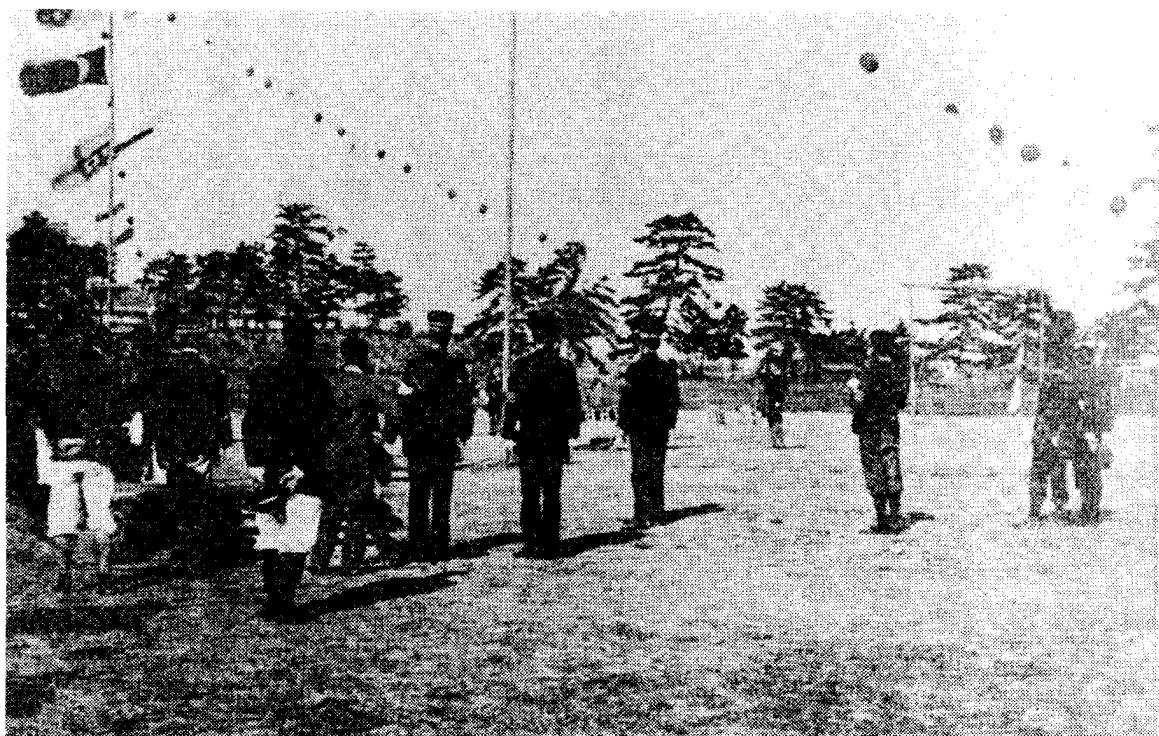
今日の名古屋大学医学部には、全学の体育会とは別の運動部組織がある<sup>(4)</sup>。その源流となるのが愛知県立医学校の同窓会運動部である。一九〇〇（明治三三）年に創立した愛知県立医学校の同窓会は、在校生の「通常会員」、本会推薦による「名誉会員」、本校職員、本校卒業生及び本校に縁のある「特別会員」からなつていた。同窓会の発会式は市内東練兵場での秋季大運動会に先立つて行われ、その写真が現存している。

同窓会は運動部、雑誌部、図書部、会計部の四部制であった。運動部は、陸上及び水上の両運動部にわかれ、陸上運動部には柔剣部、野球部、庭球部、弓道部の四部、水上運動部は、短艇部と水泳部の二部が設けられた。なお

短艇部は、一九〇一（明治三四）年に市立名古屋商業学校短艇競漕に出場し、愛知県立第一中学校を破ったことが始まりであり、水泳部は一九〇八（明治四二）年の開設である。陸上運動部の一部であつた柔剣部は一九一四（大正三）年に陸上運動部から分離している。

一九〇〇（明治三三）年に始められた陸上運動会は、東京帝国大学の例にもあるようにランニング、庭球、野球、柔剣道、綱引き等の運動競技を網羅していた。その後、各部は独立してランニング中心の陸上運動会になるが、余興や各種売店、仮装行列や独特の競技（解剖競争、繩帶競争、診断競争、内科競争、調剤競争などの趣味と実益を兼ねた競技）を見物しようと近県からも毎回数万人を超える観衆が集まっていた。<sup>(5)</sup> 娯楽の少ない当時では、エリートたちが繰り広げる一大イベントとして関心を集めると考えられる。

同窓会は、一九〇九（明治四二）年に、愛知県立医学専門学校校友会と改称され、その後一九二〇（大正九）年には、愛知医科大学が創設され、愛知県立医学専門学校校友会は愛知医科大学の校友会に包含させて「学友会」が発足した。愛知医科大学時代に



は、山岳部、乗馬俱楽部、ホッケー部、射撃部、スキー・スケート部、漕艇部が新設された。一九三一（昭和六）年に愛知医科大学は官立名古屋医科大学へ移管されるが、校友会組織は前身の愛知医科大学からの連続と認め、「名古屋医科大学鶴天学会」として継承された。名古屋医科大学時代には自動車部、帆走部が新たに加えられた。その後一九三九（昭和一四）年に名古屋医科大学から名古屋帝国大学になり、学友会は引き継がれた。

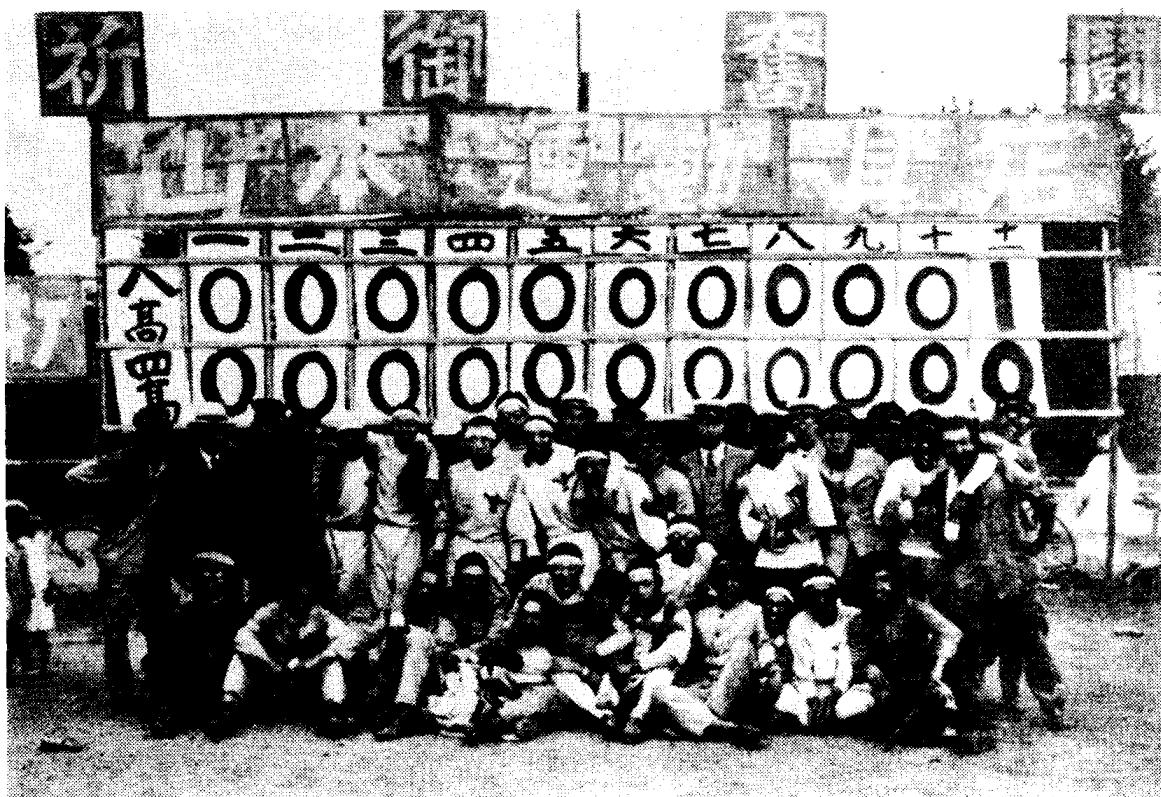
## B 第八高等学校の校友会運動部

一九〇八（明治四二）年九月に開校した第八高等学校は、創立当初から校友会が設けられた。<sup>(6)</sup> 校友会には、剣道部、柔道部、弓術部、野球部、庭球部、水泳部が設けられ、一九一〇（明治四三）には蹴球部、翌年には漕艇部が創設された。一九一八（大正七）年の創立十周年記念祭には運動会、相撲大会、野球大会、提灯行列などが行われ、これらからは当時の学生がおこなったスポーツ活動の一端がわかる。大島義脩初代校長は、特定の学生が登録する選手制度をとらず、学生全体の運動への参加普及を目指し、試合には学生有志を募つて出場していた。選手制度は、芝田徹心が第三代校長であった一九二二（大正一一）年に承認された。運動を奨励する芝田校長が第四高等学校出身ということもあり、野球の対四高戦が始まった。それを機に正式な応援団も結成されている。その後、対四高戦の種目には庭球や陸上競技が加えられた。

漕艇部は選手制度の導入で対抗戦の機運が盛り上がり、第七高等学校との対抗戦が始まられた。一九二七（昭和二）年に雨で中止された翌年からは優勝レースとして全国高等学校優勝大会が京都帝国大学主催のもと瀬田川で開催されるようになつた。第八高等学校漕艇部は第一回大会（昭和三年）、第二回大会（昭和四年）ともに優勝している。昭和五年からは、京都帝国大学と東京帝国大学の合同主催となり、固定席のポートは京都帝国大学が瀬田川で、

滑席のボートは東京帝国大学が隅田川で運営することになった。滑席のボートで行われる全国高校エイト大会では、第一回大会（昭和五年）から第三回大会（昭和七年）まで三連覇している。昭和八年からは東京帝国大学、早稲田大学、慶應大学に混じり日本の最高レベルであつた第一高等学校が参加することになった。第八高等学校は、第一高等学校に二年連続（昭和八・九年）して敗れたが、一九三五（昭和一〇）年には第一高等学校を破り優勝している。一九三六年のベルリン・オリンピックには東京帝国大学クルーが日本代表として出場しているが、そのなかのひとり中川春好は第八高等学校漕艇部のOBである。

水泳部は当初日本泳法の水府流の訓練が行われたが、一九一五（大正四）年に宇田師範が就任して水府流から神伝流が指導流儀となつた。<sup>(7)</sup>当時はプールがなかつたため、野間海水浴場やため池で泳いでいた。水泳部は、夏休みになると野間海水浴場に滞在し、練習の傍ら滞在する人々の事務的なことまでしていた。パリ・オリンピックが開催された一九二四（大正一二）年頃、東京帝国大学に進学した先輩がクロールなど



を伝授し、これまでの日本泳法からスピード泳法が行われるようになつた。一九二七（昭和二）年、校庭に貯水池兼用の二五メートルプールが完成するとともに競技会成績も向上し、全国高等学校水上競技大会では三連覇を達成している。

庭球部は、一九〇九（明治四二）年に結成された。当時は軟式テニスで京都帝国大学主催の高専大会に参加している。日本のテニス界では一九一三（大正二）年に慶應大学が軟式から硬式に変更し、一九一七（大正六）年から一九二一（大正一〇）年にかけて日本人がテニスの国際舞台で活躍したこともあり、一九三三（大正一二）年に日本庭球協会が設立された。一九三四（大正一三）年からは京都帝国大学主催の高専大会でも硬式テニスが採用されるようになった。

柔道部は中学校時代に柔道を学んだ学生が柔道場にときどき集まつては練習をしていたことが嚆矢である。

また排球は一九二三（大正一二）年に愛知一中出身の有志が休み時間に集まつてサークルバスを始めたのがきっかけとなりはじまつた。当時、排球は一般に普及していなかつたため、小学校や中学校を相手に試合をしていた。創設期は、バレーボールのパイオニアで、一九一七（大正六）年に東京で開催された第二回極東オリンピック大会のバスケットチームのメンバー佐藤金一（英語教師）<sup>(8)</sup>と、外人教師のジョンソン<sup>(9)</sup>が指導にあたつた。またY・M・C・Aの大会や美津濃運動具店主催の大会に出場していた。排球部は一九二七（昭和二）年に公認され、第八回極東オリンピック大会東海地方排籃球予選に参加している。当時は排球と籃球二つの種目の予選が同時に開催されていた。一九二八（昭和三）年にインターハイが開始され、第二回大会（昭和四年）には優勝している。一九三四（昭和九）年からインターハイを二連覇し、『八高五十年誌』には優勝の感激は乏しかつたともづられている。また籃球自体はウキリアム・アール・パークヒルが学生に教えていたが、部としては陸上競技部部長であつた佐藤金一が

初代部長に就任し、一九二六（大正一五）年度の第八高等学校一覧の校友会に登場する。一九二八（昭和三）年の

インターハイで成蹊高校を下して優勝している。実力のあつた第八高等学校であるが室内運動場がなく、学生はY・M・C・Aなどに練習に出向いていた。

サッカーは第八高等学校が創立した明治後期、高等学校のナンバースクールでは行われていなかつた。しかし学生とお雇い外国人教師ウキルデンハートとの会話のなかからフットボールの話題におよび、それがきっかけとなって一九一〇（明治四十三）年に蹴球部が創部された。一九二二（大正一一）年に第一回全国大会が東京高等師範学校のグラウンドで開催され、それに第八高等学校は出場している。そのほか運動部には相撲部（大正一一年創部）、体操クラブ（昭和五年頃）、軟式庭球倶楽部（昭和五・六年頃）、卓球部（昭和八年）、応援部、山岳部（大正一二年創部）、馬術部、射撃部、自動車部（機甲班）（昭和一八年）があつた。

### C 名古屋高等商業学校の学友会運動部

一九二二（大正一〇）年に開校した名古屋高等商業学校は、その年の一一月に校長を会長、教官を特別会員、生徒（専門学校では学生と呼ばず生徒としていた）を普通会員とした学友会が結成された。当時の会費は入会金三円、年会費六円であつた。最初に総務部や文芸部とともに剣道部、柔道部、弓道部、陸上競技部、野球部、庭球部、蹴球部が創部された。

最初に活動を始めたのは剣道部である。夏と冬に特別稽古をしたことが「剣陵十周年史」に紹介されている。<sup>(1)</sup> 一九二九（昭和四）年には宮中天覧試合に愛知県代表として名古屋高等商業学校の学生が出場している。

陸上競技部は開校した一九二二（大正一〇）年秋に市内で駅伝大会を開催したことが記録されている。これは市

民に学生の意氣をしめしたイベントであった。一九二三（大正一二）年に開催された第一回東海高専大会では八百メートルリレーで優勝している。当時、名古屋には陸上競技場がなかたため競技力は低かったが、一九二六（大正一五）年からは名古屋学生連盟の大会が始められた。一九二九（昭和四）年に名古屋唯一の公認競技場が建設されたため、各種の競技会は名古屋高等商業学校のグラウンドで開催されるようになつた。

庭球部は一九二三（大正一二）年九月に設立され、一〇月には名古屋硬球連盟に加盟し、医大、高商、高工、名俱の四チームで試合が行われた。庭球部は一九三一（昭和六）年に全国制覇している。

相撲部は一九二四（大正一三）年の春に陸上競技部から独立し、学友会の一部として正式に認められた。一九二四（大正一三）年の新土俵開きには横綱常の花、大関大の里、前頭鬼風が招待され、常の花が土俵入りしている。ちなみに角界のトップが土俵入りできたのは、関東大震災で発生した火災に合い、国技館が修復中であつたために大相撲が名古屋で開催されたことも影響している。この年東海大会に優勝し、明治神宮大会では団体三位に入賞している。また大阪の浜寺で行われた大阪毎日新聞主催の大会で個人優勝者も出している。

水泳部は一九二四（大正一三）年の秋の市内高専水上大会に優勝した記録があるが、部の体制が整えられたのは翌年である。当時の水泳部は覚王山や八事山の池で練習をしていた。一九二五（大正一四）年に関西学生水上連盟に加盟し大会に参加している。しかし名古屋高等商業学校にはプールがなく、遊泳可能な池を求めて転々としていた。中京地区は関東や関西に比べて遅い一九二七（昭和二）年に始めて七本松の正式プールが建設された。その後水泳部は七本松のプールを拠点として練習し、中等学校大会もこのプールで主催している。一九二九（昭和四）年六月にプールが建設された。水泳部は、一九二九（昭和四）年に設立した全国高商連盟の大会に出場し、翌年の第二回大会では、五種目で記録更新、総点で優勝している。入賞者の中には一九三二（昭和七）年のロサンゼルス・

オリンピックの百メートル背泳で優勝、そして晩年国際オリンピック委員会副会長となる清川正二がいる。

蹴球部は一九二五（大正一四）年の東海連盟の設立とともに加盟した。第一回リーグは第八高等学校が優勝し、

名古屋高等商業学校は二位であった。一九二七（昭和二）年春のリーグ戦で第八高等学校を破り優勝しています。

柔道部は、一九二六（大正一五）年から京都帝国大学主催の全国大会に出場している。一九三〇・三一（昭和五・六）年には全国高等商業学校連盟戦で二連覇を達成している。

野球部は、一九二九（昭和四）年から夏の高等専門学校大会出場のために東京に遠征している。同年、ミシガン大学との初の国際試合も開催し、一九三〇（昭和五）年には実業団チームである名鉄に勝利している。また南満州鉄道株式会社が野球部を招聘し、満鉄や大連実業団と試合をしている。一九三一（昭和六）年には、高専球界の全國制覇を果たしている。予選では法政予科、一高に勝利して東京地方代表となり、甲子園の優勝大会では山口高商、立命館予科を破り優勝している。

籃球部（バスケットボール部）は一九二八（昭和三）年に学友会の部として設立したが、始まりは一九二三（大正一二）年頃とされている。当時、外国人教師バークヒルが指導にあたり寮生の間で行われており、市内の大会にも参加していた。一九二八（昭和三）年五月にY・M・C・A主催の東海選手権大会に出場し、第八高等学校に敗れ準優勝している。その後競技力向上のために、校内で部の創立記念大会を開催し、優勝したノンキクラブのメンバーが横浜高等商業学校との第一回定期戦に遠征している。一九三〇（昭和五）年に高等専門学校藍球連盟が成立し第一回リーグ戦は浜松高等工業学校や第八高等学校を抑え優勝している。

ラグビー部の起源は、一九二六（大正一五）年一〇月である。第八高等学校で開催された名古屋ラグビー対大阪毎日の試合に刺激を受けて、名古屋ラグビーから与えられたボールで練習が始まつた。そして学友会の公認を受け

たのは一九二九（昭和四）年、一九三〇（昭和五）年には東海代表として花園全国大会に出場している。

ホッケー部は一九二九（昭和四）年に学友会に認められた。中京ホッケー連盟リーグ戦に参戦し、秋のリーグ戦では優勝、一九三〇（昭和五）年春のリーグにも優勝している。

馬術部は、一九三〇（昭和五）年に誕生したが、趣味としての乗馬クラブはそれ以前より存在していた。当時は野砲兵第三連隊や豊橋騎兵連隊で合宿練習を行い、対同志社高等商業学校対抗競技や名古屋学生乗馬連盟競技会に出場、全国学生選手権大会に駒を進めている。

#### D 岡崎高等師範学校の校友会運動部

一九四五（昭和二〇）年四月、岡崎高等師範学校は全国四番目の高等師範学校として設置された。しかし第二次大戦末期で校舎は空襲で全焼、終戦を迎えることになる。そのため戦時中の四ヶ月間における学生のスポーツ活動についての資料は今回見つけられなかつた。この数ヶ月間の学生の活動については今後関係者への聞き取り調査が必要である。

### III 外国人教師やトップアスリートによるスポーツ指導

名古屋大学の前身校の運動部は、お雇い外国人教官や帝国大学で活躍したアスリートからスポーツの指導を受けている。第八高等学校の運動部は、記録には三人のお雇い外国人教官の名前があげられている。米国人体育教師ウヰリアム・アール・パークヒルは一九二三（大正一二）年から二カ年の契約で運動競技師範として招聘され、各部

のスポーツの指導をしている。陸上競技、テニスを指導し、バスケットボールを八高に伝えたのもパークヒルである。またバレー・ボールは第二回極東オリンピック大会のバスケットチームのメンバー佐藤金一とジョンソンが指導している。サッカー部は、当時英会話の講師であつたウキルデン・ハートと学生の「フットボール」の会話から創部されたことが記録されている。当時のトップアスリートの指導としては、陸上競技部がオリンピック金メダリストの南部忠平から指導を受けたことが記録されている。

同様に名古屋高等商業学校にも外部の指導者が来校している。バスケットボールは第八高等学校でスポーツを指導したパークヒルと同名の人物によつて指導がなされている。<sup>(13)</sup>柔道部には一九二九（昭和四）年秋に講道館柔道の創始者、嘉納治五郎が攻防式体操の講演に来校し、講演後に指導をしている。また一九二六（大正一五）年、蹴球部に後に日本サッカー協会会长となる野津謙が指導に来校している。こうした外国人コーチやトップアスリートによる指導は今日の名古屋大学体育会運動部では考えにくい。外国人やトップアスリートの指導を受けられた理由はスポーツが欧米に由来し、高等教育機関から伝播した文化であること、そして当時の名古屋大学の前身校の歴史が浅いにも関わらずスポーツ活動が盛んであつたことに起因していると考えられる。

#### IV スポーツの組織化と試合形態の変遷 → 校内対抗から学外競技大会へ →

わが国では、加賀が指摘するように一九一〇～一〇年代にかけて高等教育機関の課外活動としてのスポーツが中・初等教育段階における活動へと身分的制約を越えて広がり始め、校内競技、対抗競技へと発展状況を呈するところとなつた。<sup>(14)</sup>また交通手段の発達、国際的な人とモノの移動の活発化によって国際的なスポーツ競技大会への参加が

始まるのもこの時期である。日本では国際大会に出場するために大日本体育協会が一九一一（明治四四）年に設立された。そして翌年のストックホルム・オリンピックに初めて参加している。

第八高等学校のスポーツ活動は、一九二三（大正一一）年に選手制度を取り入れるまで校内試合形式で行われていた<sup>15</sup>。例えば、相撲は対寮相撲大会が行われ、陸上競技も校内のクラス対抗競技程度であり、一九一〇（明治四三）年に創部された漕艇部も選手制度のなかつた時代は春に行われる校内大会が中心だった。その後、校内で選抜された学生が部員として参加する選手制度の導入で、四高戦のような他の学校との対抗戦形式の試合が行われるようになつた。一九二四（大正一二）年頃に校友会から公認された陸上競技部は、創立当初旧制静岡高等学校との対抗戦を行つてはいる。この対抗戦は後に静岡高校側からの中止の申し入れで中止になつてはいるが、その後は第四高等学校との対抗戦に参加するようになつた。

その後、二校による対抗戦形式から複数の学校が一同に会しトーナメント大会に変化した。その背景には大正末期から昭和初期にかけて学生の各種スポーツ連盟の発足が影響している。この時期各学校の運動部が連盟に加盟することで対抗戦に加え、トーナメント方式での全国的な優勝戦が導入された。例えば一九二三（大正一二）年の秋に東海学生体育連盟が結成され、学校間で競われる第一回陸上競技大会が開催され、一九二六（大正一五）年には文部省主催の第一回高等学校陸上競技大会が神宮競技場で行われている。また柔道では、一九三〇（昭和五）年に名古屋学生柔道連盟が発足している。

## V スポーツを通じた中等学校との交流

第八高等学校の運動部は地域の中等学校を集めた大会を主催し、下級学校生徒とのスポーツを通じた交流活動をおこなっている。一九一八（大正九）年の開校十周年記念祭では、柔道、剣道、弓道、野球、陸上競技で中等学校大会が開催されている。これらの取り組みを行う理由のひとつには陸上競技部がなかなか第四高等学校に勝つことができないことが上げられる。そのため関西地方の中学校の優秀な生徒をスカウトすることにひとつの目的があつた。また東海地方の中等学校大会を第八高等学校が主催し、優れた中学生を集めていた。プールのあつた第八高等学校では、一九三五（昭和一〇）年に中部日本中学校水上競技大会も開催している。同じように柔道部は近県中等学校柔道大会、庭球部は近県中等学校庭球大会を開催している。また当時盛んに行われていた新聞社の事業との連携も見られ、排球部は第八高等学校主催中等学校を新愛知新聞社の後援で開催している。<sup>(16)</sup>

名古屋高等商業学校も同様である。柔道部は一九二三（大正一二）年から中等学校柔道大会を主催し、同年庭球部は全国中等学校庭球大会を主催している。剣道部は、一九二四（大正一三）年秋から全国中等学校剣道大会を主催し、若き剣士の登竜門としての役割を果たしている。野球部も一九二五（大正一四）年から近県中等学校大会を開催し、回を重ねるうちに市内の年中行事のひとつにもなっている。弓道部は一九二五（大正一四）年秋に前年オーブンした名高商道場で中等学校大会を開催している。このように各運動部が各地の中等学校を集め大会を主催したこととは結果として下級学校のスポーツ活動に刺激を与え、スポーツ普及の一役を担つたと考えることができる。

## VI スポーツの普及と国家の政策的関与

前身校のスポーツ活動が展開された時期は、わが国のスポーツの普及期でもある。一九二二（大正一〇）年調査の大坂市民の余暇生活を紹介した加賀<sup>(17)</sup>は、対象によつて性別、年齢別に差異があるが、スポーツが市民生活に定着してきたことを述べている。いっぽう政府もスポーツに対する政策的関与に乗り出している。一九二四（大正一二）年に「全国体育デー」を設け、また明治神宮競技大会の開催を決めた。さらに第八回のパリ・オリンピック大会から国庫補助金を交付している。一九二六（昭和一）年には「学校体操教授要目」が改正され、スポーツが教材として小学校、高等女学校、女子実業学校、中学校、男子実業学校、師範学校に導入された。

この時期の市民へのスポーツ普及の背景にはマスメディアにスポーツが掲載されたこともあるが、スポーツ施設が新設され、それらが活用されたことも見のがせない。<sup>(18)</sup> 例えば第八高等学校の陸上競技場は、一九二五（大正一四）年に整備され、一九二七（昭和二）年には野球用の金網をめぐらせた鉄塔が設置され、同年に新道場やプールも完成している。名古屋高等商業学校の運動場には、野球、ラグビー、蹴球、ホッケーの設備があり、一九二九（昭和四）年に完成した陸上競技場は名古屋唯一の公認トラックとして、差し支えない範囲で外部団体の運動会などに使用されていた。また名古屋高等商業学校には排篮球場、弓道場（一九二四（大正二三）年）、テニスコートが整備された。またプールについても中京地区は関東や関西に比べて遅いものの、名古屋体育協会が一九二七（昭和二）年に七本松に初めて正式プールがつくられ、第八高等学校には同年貯水池兼用のプールが、名古屋高等商業学校には一九二九（昭和四）年に完成している。

## VII 戦時体制と高等教育機関のスポーツ

戦時体制によつて、「自治と自由を伝統として展開されてきた、学校における課外活動組織である校友会に対する、政府の統制が強化」<sup>(19)</sup>された。「スポーツ八高」と呼ばれた第八高等学校も一九四一（昭和一六）年には校友会が改組され、第八高等学校報国団となり、運動部の活動も縮小もしくは停止になつた。同年、インターハイは軍事輸送の事情で突然中止され、文部省は学生体育の一元的な管理体制をはかるために大日本学徒体育振興会を設立した。これにより高等専門学校のインターハイも大日本学徒体育振興会と文部省が統括する官製インターハイとなつた。<sup>(20)</sup>そしてインターハイは一九四二年度に開催されたものの、翌年は開催直前に中止された。一九四三（昭和一八）年には学徒勤労動員、防空活動、交通輸送制限、スポーツ用具の原料制限等が学生のスポーツ活動を拘束し、運動競技会はすべて延期となり、対四高や対三高のような対抗戦が一部行われるだけになつた。大日本体育会の各部会では各米英式の名称を廃し、競技の内容とともに日本化を図つていた。一九四三（昭和一八）年にはラグビー蹴球が闘球、ホッケーが杖球、ゴルフが打球と名称変更された。また野球用語も同年には例えればセーフは「よし」というよう邦語化した。同年三月には「戦時学徒体育訓練実施要綱」<sup>(21)</sup>が制定され、全国大学、高専校長並びに各地方長官あてに「戦時体育実施」の通牒を発せられた。結局、第八高等学校では昭和一九年には球技はすべて廃止されてい る。

## VIII 戦後の新制名古屋大学発足までのスポーツ活動

戦後一九四九（昭和二十四）年の新制名古屋大学設立まで、第八高等学校、名古屋経済専門学校、名古屋大学附属医学専門部、岡崎高等師範学校がそれぞれ独立した機関として存在していた。当時戦後の混乱期にあつても学生がスポーツ活動をしていた記述が見られる。名古屋帝国大学では一九四六年三月末の報国会の解散前後に各学部に文化・スポーツなどのサークルが生まれていた。<sup>22)</sup> 一九四七年には野球部（部員数三三一名）、陸上競技部（三五名）、排球部（二五名）、軟式庭球部（五〇名）、蹴球部（三〇名）、漕艇部（一五名）、卓球部（三六名）、山岳部（一二名）、籠球部（二三名）、庭球部（一〇名）、馬術部（不明）、体操部（一六名）、ラグビー部（三一名）、水泳部（五〇名）<sup>23)</sup> が活動しており、一九四七年には大阪大学との対抗戦（名阪戦）が開始された。<sup>24)</sup> 『八高五十年誌』によれば、一九四六年（昭和二二）年にはインターハイが再開する競技が見られる。新制名古屋大学の体育会運動部のなかには、戦後直後から再開された前身校の運動部の流れを引き継いだものもある。例えば、陸上競技部は、一九二四（大正十三）年に第八高等学校と愛知医科大学に設立された組織が起源であり、水泳部は第八高等学校の遊泳班を引き継いでいる。

岡崎高等師範学校では戦災、豊川への移転、生活の困窮という激動のなかで自然発生的に教職員学生の文化向上、生活福祉を目的とする自治会、校友会、共済会が生まれた。一九四九（昭和二十四）年には、この三つの組織がひとつになり学生会が発足した。運動部は旧校友会から引き継がれ学生会の中に組み込まれた。運動部は校内のレクリエーションをはじめ、大阪大学との対抗競技も行っていた。蹴球クラブは、開校半年後には誕生していた。当時は

ラグビー部と同棲しており、裸足のままボールに戯れるような状態であつた。その後、東京文理大から教官が着任し指導を行つたことが記されている。野球クラブは一九四六（昭和二二）年になんとか道具をそろえ、一九四七（昭和二三）年には四師リーグ戦で優勝している。庭球クラブは一九四六（昭和二二）年度に発足し、一九四七（昭和二三）年には四師リーグで優勝もしています。排球クラブは、唯一配給のあつた一個のボールで始め、一九四七（昭和二三）年には東海学連の試合に参加している。卓球クラブは一九四七（昭和二二）年に寮の食堂にあつた古い卓球台を使って始められた。籠球クラブは一九四八（昭和二三）年に始まり、四師対抗戦では優勝している。その後一九四九（昭和二四）年に名古屋大学の学部、分校、第八高等学校、名古屋経済専門学校とともに合同し、名古屋大学籠球クラブが発足した。そして新制名古屋大学発足とともに合流することになった運動部は、公式大会においては旧制名古屋帝国大学、第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校が全名大として出場するようになった。

## IX 結び

第八高等学校や名古屋高等商業学校が開学した時期は、新聞社が競つてスポーツ大会を開催する時期であり、外来文化である近代スポーツが国民に普及していく時代と重なつてゐる。本稿で紹介したように名古屋大学の前身である諸学校においてもスポーツ活動は活発に行われ、スポーツが学生生活に根づいていたことがあきらかになつた。このように高等教育機関の学生が熱中し、そして卒業後も同窓会誌などで語り継がれるスポーツ活動は、社会学的にみれば、文化・社会的に規定されるひとつの「行為」として分析できる。つまり学生が「競い合い」の身体活動

に対して欲求を持ち、その欲求に応える形で欧米由来のスポーツに夢中になる目的が一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて学内的・社会的に形成されてきたと考えられる。また今回の分析によつて名古屋地域では大正から昭和初期にスポーツに関連した「資源」が整備されていったことがわかる。本稿の旧大学や旧高等教育諸機関の運動部の競技成績からだけではわからないが、スポーツが高等教育機関で繰り広げられることで、欧米の「sport」が日本の社会規範に適応して「スポーツ」へと変容し、当時の社会に求められた模範的な「行為」となつていつたと仮定することもできる。そして高等教育機関の学生たちは社会に求められた「行為」である「スポーツ」によってアーデンティティを表現するというループが形成されていったと思われる。今日においても我われは名古屋大学において大学が公認する体育会運動部のスポーツ活動を目にすることができる。大学において引き継がれてきた学生によるスポーツ活動という「行為」を社会学的文脈で理解するには、この「行為」の意味について歴史的な分析をすることが大切である。今後はこれらの「行為」を分析するために、戦後の体育会における「行為」の意味の変遷にメスを入れるとともに、学生の日記や学生の執筆した出版物、さらには学生のスポーツについて書かれた当時の新聞や雑誌などの資料を収集し、心理的、社会・文化的な視点から分析を加えることが必要であると考える。

### 注

- (1) 岸野雄三編著『体育史講義』、九三頁、大修館書店、一九八四年
- (2) 岸野雄三編著『体育史講義』、一九四頁、大修館書店、一九八四年
- (3) 校友会組織の正式名称は組織によつて異なる。愛知県立医学校同窓会は、愛知県立医学専門学校校友会、愛知医科大学学友会、名古屋医科大学鶴天学友会と組織改変とともに名称が変化した。第八高等学校は校友会、名古屋高等商業学校は学友会、終戦間

際に創立した岡崎高等師範学校は校友会、後に学生会となつてゐる。

- (4) 医学部の学友会については、名古屋大学医学部名古屋大学史（医学部）編集委員会編『稿本 名古屋大学医学部百拾五年史』（四七〇～四八一頁、名古屋大学医学部、一九八八年）が詳しく、本稿も多くを引用した。

- (5) 名古屋大学医学部名古屋大学史（医学部）編集委員会編『稿本 名古屋大学医学部百拾五年史』（四七〇～四八一頁、名古屋大学医学部、一九八八年）

- (6) 第八高等学校の校友会は、八高創立五十年記念事業実行委員会『八高五十年誌』（八高創立五十年記念事業実行委員会、一九五八年）、『伊吹おろしの雪消えて』（財界評論新社、一九七三年）、『瑞陵スパイクの跡 八高陸上競技部史』（八高陸上競技部史委員会、一九八二年）、『剣ヶ森の血脉』（第八高等学校排球部編、産業能率大学出版部一九八〇年）に詳しい。

- (7) 水泳部の歴史は、『八高五十年誌』によれば、野間遊泳部時代、初期競泳部時代、プール建設時代、黄金時代、伝承時代、戦時暗黒時代、戦後にわけられる。八高創立の明治四年に学生が野間に水泳に来たのが野間海水浴場の起源とされている。

- (8) 一九二〇（大正九）年に、清水善造がウインブルドンの全英選手権大会に日本から初めて、出場、決勝戦でチルデンに接戦の末やぶれた。また同年開催されたアントワープ・オリンピック大会に熊谷一彌、柏尾誠一郎が出場し、単、複に日本人として初めて銀メダル獲得している。

- (9) 第八高等学校排球部編の『剣ヶ森の血脉』（産業能率大学出版部、一三頁及び四一五頁、一九八〇年）には、バレーボールの指導に当たつた佐藤金一とともに佐藤が連れてきた外人教師ジョンソンの名前も記述されているが、『第八高等学校一覧』（大正一四年度）には現役の職員名簿、さらに前職員名簿のなかにジョンソンの名前はない。ジョンソンを全く外部の人間であると考えることもできるが、佐藤金一と同じ第一語学科に外国人教師のカスバート・クーパー・ロビンソンがおり、座談会で発言している今川憲次がジョンソンとロビンソンを誤つて記憶している可能性もある。

- (10) スポーツ用品メーカーのミズノ株式会社の前身。創業は一九〇六年。

- (11) 名古屋高等商業学校の課外活動は、名古屋高等商業学校其湛会『剣陵十周年史』（其湛会、一九三一年）に詳しい。

- (12) 『第八高等学校一覧』（大正一五年度）によれば、外国人教師のピー・ゼー・ウキルデンハートは大正三年四月に解約してゐる。

『伊吹おろしの雪消えて』（財界評論新社、一九七二年）によれば、ピー・ゼー・ウヰルデンハートは県立五中、明倫中、第一師範などに出張してフットボールを教授した。

(13) 『第八高等学校一覧』（大正一二年度及び一三年度）によれば、ウヰリアム・アール・パークヒルは大正一二年から第八高等学校の体操科の教師をしている。また同名のパークヒルが『名古屋高等商業学校一覧』（大正一二年度及び一三年度）に体操の外国人教師として名前があるが同一人物であるとの記述は見つけられなかつた。

(14) 加賀秀雄「わが国における太平洋戦争への道とスポーツの歴史的動向」、『東海保健体育科学』第二二二号、一〇一五頁、東海体育学会、二〇〇〇年

(15) 『八高五十年誌』（一四三頁）に寄稿した森河敏夫によれば、第八高等学校の選手制度導入が遅れた理由は、大島義脩校長がナンバースクールでも開校が遅い第八高等学校の名声をスポーツではなくよく出来る生徒を育成することであげようと考えていたことに起因していると述べている。『稿本名古屋大学五十年史二』（稿本名古屋大学五十年史編集委員会、五七頁）には、第八高等学校の「運動奨励ニ関スル方針」をあげ、そのなかに選手制度を認めない項目があることを紹介している。

(16) 近代のスポーツ競技大会が新聞社の事業として立ち上げられてきた歴史については津金澤聰廣編の『近代日本のメディア・イベント』（同文館、一九九六年）が詳しい。

(17) 加賀秀雄、前出。

(18) 加藤良治「名古屋市社会教育施設一覧（大正一五年～一九二六年）」の紹介、「社会教育研究年報」第一五号、一六三～一七八頁、名古屋大学大学院教育発達科学研究中心・生涯教育学研究室、二〇〇一年によれば、大正一五年当時名古屋市につたスポーツ施設は、市立の鶴舞公園運動場、中村公園運動場があつた。また市民運動場の計画があつた。そのほか私設の山本グラウンド、尾電八事球場、尾電八事競技場、多加良浦プール、多加良浦海水浴場、スケート場があつた。ちなみに名古屋体育協会は一九二三（大正一二）年設立。

(19) 加賀秀雄、前出。

(20) 『稿本名古屋大学五十年史四』「第二編第一章戦時体制と名古屋帝国大学・高等教育諸学校」（七二一ページ）

- (21) 「戦時学生体育訓練実施要綱」は学校における正科としての体育訓練、戦技訓練・基礎訓練・特技訓練などを対象とする課外としての体育訓練、報国団としての体育訓練などの強化を図り、精神訓練・体力訓練・科学訓練の一体化をねらうものである。
- (22) 『稿本名古屋大学五十年史六』「第二編第三章敗戦と名古屋帝国大学・高等教育諸学校」(八〇ページ)
- (23) 『稿本名古屋大学五十年史六』「第二編第三章敗戦と名古屋帝国大学・高等教育諸学校」(八三ページ)

(たかはし・よしお 総合保健体育科学センター)